様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　4 月　9 日現在

機関番号：32620
研究種目：　基盤研究(C)
研究期間：　2008～2011
課題番号：２０５９２５６２
研究課題名（和文）　自己免疫疾患患者の QOL 向上をめざした看護支援プログラムの開発
研究課題名（英文）　Nursing　program development for autoimmune disease Improve QOL

研究代表者
青木　きよ子（AOKI KIYOKO）
順天堂大学・医療看護学部・教授
研究者番号：５０２１２３６１

研究成果の概要（和文）：SLE 患者の療養上の困難には、年齢、性別、症状の有無が関連していた。また、慢性関節リウマチ患者の療養上の困難には、症状の有無、医療福祉サービスの利用、セルフケア行動が関連していた。両疾患患者ともに療養上の困難には QOL との強い相関があり、療養上の困難の低減をはかるためは、症状のコントロール、医療福祉サービスの利用、セルフケア行動がとれるための支援をし、QOL の維持・向上を図る看護支援が必要であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Difficulties faced by patients　with SLE, the presence of age, sex, symptoms were related.　In addition, difficulties faced by patients with rheumatoid arthritis use the presence or absence of symptoms, medical and welfare services, self-care behavior were related. Difficulties faced by patients was a strong correlation with the QOL in patients with both diseases together. From these, made it clear that it is necessary to maintain and improve the QOL of the difficulties be reduced on the medical treatment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	2100,000	910,000
2009 年度	700,000	2100,000	910,000
2010 年度	400,000	1200,000	520,000
2011 年度	400,000	1200,000	520,000
年度			
総　計	2,200,000	6600,000	2,860,000

研究分野：　医師薬
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：自己免疫疾患　療養上の困難　セルフケア行動　QOL 看護支援　プログラム開発

１．研究開始当初の背景

慢性病患者では、病気の不確かさも相まって患者および家族のエンパワーメントは徐々に低下しがちとなる。そのため、患者および家族のエンパワーメントを培い、セルフケア能力を高め、予防的視点を含め患者・家族の QOL を維持できるように支援する必要があるといえる。

自己免疫疾患について我が国においては、厚生労働省の特定疾患治療研究対象疾患に認定されている病気が多く、病態と治療法に関する研究成果から治療指針が作成されてきた。有色人種でとりわけ女性に多いとされている自己免疫疾患に関する看護研究については、病を説明する概念の研究が中心に行われ、欧米でも、自己免疫疾患のうち妊娠との関わりについての SLE 研究が多く見られるが、看護支援についての研究はごく僅かであ

った。
そこで、本研究では、いままで報告されていない自己免疫患者にとっての、セルフケア能力の維持や、QOL に影響すると思われる、患者の特有の療養上の問題やセルフケアの阻害要因とその対処法を明らかにする。これらをもとに実践に活用できる看護支援プログラムを作成し、これらをその有効性を検討する。この一連の検討をすることは、自己免疫疾患患者の QOL の向上と、患者のエンパワーメントを高めることへの貢献が予測される。さらに、研究成果の少ない自己免疫患者における看護実践の evidence の蓄積に寄与できるものと考えた。

２．研究の目的
本研究では、慢性病の中でも、多彩な症状が全身に出現し、病気に対する不確かさ、不安、ボディイメージの変化、社会的交流の減少、経済負担の増大などが予測される自己免疫患者の QOL を高める支援プログラムの開発に資することを目的とする。

３．研究の方法
①SLE 患者の特有な療養上の問題とセルフケアの阻害要因や対処法を把握する。
②療養上の問題およびその関連要因をアセスメント指標にし、看護介入を行いその効果を検討する。
③SLE 患者における特有な療養上の問題やセルフケアの阻害要因や対処法を参考に、関節リウマチ患者に特有な療養上の問題やセルフケアの阻害要因や対処法を把握する。

４．研究成果
①目的: SLE 患者の特有な療養上の問題とその関連要因を把握する。
方法: 首都圏の特定機能病院に通院している SLE 患者 162 名に、16 項目の療養上の困難と背景要因についての自記式質問紙調査を実施し、有効回答数 116 名を分析した。
倫理的配慮;研究者の所属機関および対象患者の受療機関の研究等倫理委員会の承認を得た。対象患者には研究の趣旨を説明し、書面で同意を得た。
結果:対象者の平均年齢は 46.8 歳、女性が 9 割以上と性差を認め、罹病期間は 5 年以上で、就労状況は主婦や非正規社員が多く、特定疾患医療費補助の利用者が多かった。セルフケア行動では、定期受診と服薬の実施率が高くなっていた。
療養上の困難は、病気の進行に対する不安や、将来への不安など、病気の不確かさによるものの認知が高くなっていた。療養上の困難の 16 項目は、因子分析で【療養に伴う心理的ストレス】【身体症状に伴う苦痛】【外見の変化への戸惑い】【経済・役割上の軋轢】の 4 因子が抽出された。
療養上の困難認知の G-P 分析では、トータルスコアおよび４因子において有意差があった。さらに、療養上の困難認知の関連要因としては年齢、性別、症状の有無、QOL があげられた。
以上の結果から、患者の療養上の困難の認知は特に QOL と強い相関があり、療養上の困難認知の低減をはかることが QOL の維持・向上に必要であることが示唆された。

②目的: 通院中の女性 SLE 患者が認知する療養上の困難に関する経年的変化とその関連要因を明らかにする。
方法: 首都圏の特定機能病院に通院している女性 SLE 患者に、16 項目の療養上の困難と背景要因を自記式質問紙調査した。分析対象者は初回調査 109 名、2 回目調査 122 名である。
倫理的配;研究者の所属機関および対象患者の受療機関の研究等倫理委員会の承認を得た。対象患者には研究の趣旨を説明し、書面で同意を得た。
結果:対象者の平均年齢は 44.7 歳、罹病期間は 5 年以上で、就労状況は主婦や非正規雇用が多かった。これらの要因は 2 回の調査において有意な差はなかった。
療養上の困難としては、2 回の調査とも「病気の進行に対する不安」、「将来への不安」、「医療費の負担」を高くなっていた。次いで、「倦怠感」、「関節痛」、「浮腫」、「いらいらする」などの辛さをあげていた。16 項目の中で 2 回の調査において医療費の負担($p<0.01$)のみ有意差があった。療養上の困難の認知と年齢、支援者の理解、QOL に相関があった。
以上の結果から、療養上の困難認知は 2 回の調査で同様の傾向を示し、病気の進行や将来への不安など、病気の不確かさによる認知が高くなっていた。医療費の負担が患者の抱える問題として上げられた。

③目的: SLE 患者のセルフケア行動が、QOL にもたらす影響を明らかにする。
方法: 首都圏の特定機能病院に通院している SLE 患者 162 名に、セルフケア行動について、自記式質問紙調査を実施し、有効回答数 116 名を分析した。
倫理的配;研究者の所属機関および対象患者の受療機関の研究等倫理委員会の承認を得た。対象患者には研究の趣旨を説明し、書面で同意を得た。
結果及び考察:外来通院中の SLE 患者のセルフケア行動の特徴としては、治療薬の効果が高いため、患者も内服薬の重要性を理解し、実行していた。また、人間関係や仕事でのストレスが病気に影響を及ぼすことを理解してはいるものの、適切な対処法がとられてい

るとはいえない状況があった。セルフケア支援においては、病状の把握とともに家庭、社会的支援環境を把握し、病の軌跡に応じた情報提供、環境調整行う必要性があった。

④目的：外来通院中の女性ＳＬＥ患者が行う心理社会面のセルフケア行動が療養上の困難認知とQOLにもたらす影響を明らかにする。
方法：首都圏の大学病院に通院中のＳＬＥ患者を対象に質問紙調査を行った。回答を得られた女性患者122名分を分析した。
倫理的配;研究者の所属機関および対象患者の受療機関の研究等倫理委員会の承認を得た。対象患者には研究の趣旨を説明し、書面で同意を得た。
結果：セルフケア行動を実施していると答えた人は、「他者と交流する」62 人（50.8%）、「人間関係を円滑にする」64 人（52.5%）、「ストレスをためない」43 人（35.2%）、「社会資源を利用する」36人(29.5%) であった。年齢を 45 歳で２群に分けて分析すると、両群で「他者と交流する」人の方がQOL得点平均値は高くなっていた(p<0.01)。療養上の困難認知では、45歳以上の群では「他者と交流する」人の「療養上の心理的ストレス」(p<0.01)と「症状の苦痛」(p<0.05)に関する困難認知は低く、45歳未満の群では「他者と交流する」人の「外見の変化」(p<0.05)に関する困難認知が低くなっていた。
　これらの結果から、他者との交流努力がＳＬＥ患者の療養上の困難認知、QOL と関連することが明らかになった。患者の社会的背景や生活活動を考慮に入れた上で、他者との交流の重要性を伝える、交流の機会を提供するなどの看護介入の必要性が示唆された。

⑤SLE 患者における特有な療養上の問題やセルフケアの阻害要因や対処法をもとにアセスメントと看護介入を行い、その効果を検証する。
方法:17 才、SLE 患者の介入研究を行った。これまでの調査結果から、SLE 患者の療養上の困難認知は、「病気の進行に対する不安」、「将来への不安」、「医療費の負担」同様の傾向を示し、病気の進行や将来への不安など、病気の不確かさによるものであることが明らかとなった。それらを低減するためには、セルフケア行動の中でも、他者との関係を良好に保つことの必要性が示唆された。介入事例では、これらの項目についてアセスメントし、病気の進行や将来への不安など、病気の不確かさによるものと、医療費の負担が患者の抱える問題として上げられた。そのため、病気の進行に対する不安や、将来への不安など、病気の不確かさによるものの低減をはかるとともにセルフケア支援として、本人が希望している ADL 拡大への支援と、家族に対して社会資源の活用のための情報提供や他社との交流の機会を増やす方法を提案した。その結果、介入前との比較において QOL 尺度得点の著明な改善を見ることができた。

⑥目的:関節リウマチ(以後 RA)患者がとらえる療養上の困難とその関連要因を明らかにし、看護介入のための基礎資料を得る。
方法;外来通院中の RA 患者に質問紙調査を実施した。調査項目選定は、International Classification of Functioning, Disability and Health を枠組みとした。療養上の困難は自作の 16 質問項目である。「非常に困難 4」～「ほとんど困難でない 1」の 4 件法で回答を求め得点化した。この調査項目の併存妥当性確認のために mHAQ を用いた。影響要因は年齢、性別、職業、社会参加、履病期間、自覚症状、セルフケ行動、近親者のサポート、QOL 尺度等を選定した。質問紙配布者 193 名のうち、有効回答者 158 名分を分析対象とした。分析は、療養上の困難の調査項目について記述統計量の算出をした。また、療養上の困難の合計得点と影響要因および mHAQ との関連について検討した。
倫理的配;研究者の所属機関および対象患者の受療機関の研究等倫理委員会の承認を得た。対象患者には研究の趣旨を説明し、書面で同意を得た。
結果:患者がとらえる療養上の困難の認知の高い項目は、「病気進行の不安」「将来の不安」「関節痛」「疲労感」「医療費の負担」の順であった。療養上の困難の合計得点と mHAQ には、r=0.754 と相関あり併存妥当性が認められた。療養上の困難合計得点と p<0.05 で関連が認められたものは、年齢、性別、症状の有無、入院回数、NSAID・生物製剤の使用、医療福祉サービスの利用、QOL であった。重回帰分析からは、QOL、医療福祉サービスの利用、セルフケア行動に関連性が認められた。
　以上の結果から、RA 患者の治療は生物学的製剤の導入により治療の選択肢が広がり画期的に変わりつつあるが、このような状況においていて、RA 患者は、療養上の困難に対して、セルフケア行動をとるとともに社会的なサービスを利用して病気と対処し、QOL の維持に努めているといえた。

⑦目的;生物学的製剤療法を受ける関節リウマチ患者における日常生活動作の困難度と QOL を明らかにし、看護支援に必要な示唆を得る。
方法:A 大学病院に外来通院中の関節リウマチ患者のうち回答の得られた 158 名を対象に、個人特性、mHAQ、特定疾患に共通の QOL 尺度を使用した質問紙法により横断的調査を実施、郵送法にて回収した。
倫理的配慮;所属大学および当該施設の倫理

委員会の承認を得て調査を実施した。対象者へ口頭および文書で研究の主旨等について説明し同意を得た。
結果:158 名のうち、生物学的製剤療法を受けている患者は 54 名（34.8%）、罹病期間は 10 年以上（59.3%）が最も多かった。「生物学的製剤使用あり」群の個人特性については「入院経験」（p＜0.01）、「入院回数」（p＜0.05）、「福祉サービス利用」（p＜0.01）で有意差があった。利用している福祉サービスは「身体障害者手帳」（p＜0.05）、「医療費控除」（p＜0.05）、「高額療養費助成制度」（p＜0.01）の項目で「使用あり」群が「使用なし」群より有意に高かった。［mHAQ］における得点の平均は「使用あり」群が 1.5、「使用なし」群が 1.3 であり有意差があった（p＜0.01）。［特定疾患に共通の QOL 尺度］における得点の平均は「使用あり」群が 11.0、「使用なし」群が 12.6 であり有意差があった（p＜0.05）。9 項目のうち「今の自分が好き」（p＜0.05）、「周囲の偏見を感じる」（ｐ＜0.05）、「生きる目標を持っている」（ｐ＜0.05）、「いきいきしていると感じる」（ｐ＜0.05）の 4 項目で「使用なし」群が「使用あり」群より有意に高かった。
　これらの結果から、生物学的製剤療法の導入により関節リウマチ患者の ADL 拡大や QOL 向上が期待されているが、日常生活においては困難を感じ、このような状況にある自己を受容できていない現状が明らかとなった。患者自身が疾患を持ちながら生活している現状を受入れ、高い志気を持つことができるよう支援していくことの必要性が示唆された。

⑧目的：外来通院中の慢性関節リウマチ患者の心理社会的面のセルフケア行動が、QOL にもたらす影響を明らかにする。
方法：日本の首都圏にある大学病院に通院中の慢性関節リウマチ患者を対象に質問紙調査を行い、回答の得られた 144 名分を分析した。
倫理的配慮;所属大学および当該施設の倫理委員会の承認を得て調査を実施した。対象者へ口頭および文書で研究の主旨等について説明し同意を得た。
　セルフケア行動を積極的に実施していると答えた人は、「家庭での人間関係を円満にする」107 人（74.3%）「家族以外の他者と交流する」86 人（59.7%）「ストレスをためないようにする」82 人（56.9%）であった。QOL 合計点数との関連では、「家庭での人間関係を良好に保つ」と「家族以外の他者と交流する」の項目で積極的に実施すると答えた人の方が、QOL 得点が高くなっていた（P<0.05）。
　これらの結果から、人間関係を円滑に保つというセルフケア行動は、慢性間接リウマチ患者の QOL に影響を及ぼしていることが明らかになった。他者との交流の促進・阻害要因をより具体的にし、支援につなげる必要性が示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
①青木きよ子,高谷真由美,田邊雅美,高崎芳成：外来通院中の全身性エリテマトーデス患者の認知する療養上の困難と関連要因.医療看護研究.査読あり．5(1)，30-39，2009.

〔学会発表〕（計 7 件）
①桑江久美子、青木きよ子、高谷真由美：SLE 患者のセルフケア行動と関連要因．第 3 回日本慢性看護学会学術集会（東京）、2009.7.4

②青木きよ子、高谷真由美、桑江久美子、高崎良成：我が国おけるSLE患者のセルフケア行動と療養状の困難の経年的変化．The 2nd International Conference on Prevention and Management of Chronic condition and The 11th World Congress of Self-care Deficit Nursing Theory (Thailand),2011.3.23

③高谷真由美、青木きよ子、桑江久美子、高崎良成：我が国おけるSLE患者の自己効力感と療養状の困難との関連．The 2nd International Conference on Prevention and Management of Chronic condition and The 11th World Congress of Self-care Deficit Nursing Theory (Thailand),2011.3.24

④青木きよ子・樋野恵子・高谷真由美・桑江久美子：外来通院中の関節リウマチ患者が認知する療養上の困難．第 31 回日本看護科学学会学術集会（高知）、2011.12.2

⑤樋野恵子、青木きよ子、高谷真由美：生物学的製剤療法を受ける関節リウマチ患者における日常生活動作の困難度と QOL、第 5 回日本慢性看護学会学術集会（岐阜）、2011.6.25

⑥青木きよ子・樋野恵子・高谷真由美・桑江久美子：我が国における外来通院中の関節リウマチ患者が認知する療養上の困難．15th East Asian Forum of Nursing Scholars (Singapore)，2012.2.22

⑦高谷真由美・青木きよ子・樋野恵子・桑江久美子：関節リウマチ患者のセルフケア行動とQOL．15th East Asian Forum of Nursing

Scholars (Singapore), 2012.2.23

６．研究組織

(1)研究代表者

青木きよ子（AOKI KIYOKO）

順天堂大学・医療看護学部・教授

研究者番号：５０２１２６３１

(2)研究分担者

高谷真由美（TAKAYA MAYUMI）

順天堂大学・医療看護学部・准教授

研究者番号：３０２６９３７８